

---

## 『<sup>げいかいぎょふ</sup>魔海魚譜』と画師木脇啓四郎について

小濱 亜由美

九州産業大学芸術学部非常勤講師

---

『魔海魚譜』とは、明治 16 年(1883)に東京上野で開催された第 1 回水産博覧会に、鹿児島県勸業課が出品する目的で作成された。鹿児島県知事渡辺千秋の命により、編纂者白野夏雲のもと、2 人の絵師木脇啓四郎と二木直喜が作画した。「魔」とは鹿児島のことで、鹿児島湾を中心に生息する海洋生物が描かれた 344 図の彩色写本と、325 図からなる刊本とがある。これまでの論考は、島津出版会による『新編 魔海魚譜』や上野益三氏著『薩摩博物学史』などがあるが、いずれも博物学の分野からの論述であり、文化史および美術史的な面での論考はおこなわれていない。

従来の本草書に載せられた動植物図は、専ら挿図的な役割であり、魚図も例外ではなかった。江戸時代の中頃から、大名や本草学者などにより盛んに博物図譜が作られるようになると、魚貝類だけで編纂される魚譜も現れ始めた。そのなかでも代表的な魚譜として、『衆鱗図』(明和 4・1767 年頃)がある。『衆鱗図』は、高松藩主松平頼恭の命により編纂された博物図譜であるが、絵師が美的技巧をこらし極彩色に銀箔や金箔を加えて描かれており、その転写例は多く、後のさまざまな魚譜の編纂に大きな影響をあたえた。大名や本草学者のネットワークのなかで、多くの博物家の目に触れ、転写が重ねられて行くが、その一端に『魔海魚譜』も含まれると考える。また、その博物家のネットワークのなかには、第 8 代薩摩藩主島津重豪がおり、薩摩藩を江戸時代本草学の一つの中心地にしたという伝統も、『魔海魚譜』編纂の背景には働いている。本草書の挿図としての枠を越え、新しい博物図として、そして絵画作品として、『魔海魚譜』と編纂の背景とについて考える。

併せて、『魔海魚譜』の絵師木脇啓四郎と二木直喜にも着目する。近世から近代にかけての鹿児島(薩摩)の美術については、近世では木村探元を中心にした絵師の活躍が、そして近代以降は黒田清輝、藤島武二、和田英作などの近代洋画家の輩出が主に語られている。近代の狩野派の流れをくむ絵師たちは、洋画壇の陰に隠れ、黒田清輝が日本画の手ほどきを受けた樋口探月、藤島武二が学んだ四条派の平山東岳など、わずかな絵師が取り上げられているだけで、その他の絵師たちについての言及は少ない。このなかで、明治 16 年に完成した『魔海魚譜』は、薩摩の伝統的な画法の中にいた絵師によって描かれたが、彼らが新来の西洋絵画や博物図譜などを学び、新しい分野の作品に挑戦している様子がうかがえる。特に、比較的資料が残る木脇啓四郎について、その人と画業についても考察する。